

# 中世説話作品に見られるオノマトペ

—『古今著聞集』『沙石集』を中心に—

中 里 理 子

A Research on Onomatopoeia in Medieval Narratives:  
Focusing on *Kokonchomonju* and *Syasekisyu*

Michiko NAKAZATO

## 要 旨

中世の説話作品のうち『古今著聞集』『沙石集』を中心に計9作品を取り上げ、使用されたオノマトペを調査し、説話のオノマトペの特徴をまとめた。『古今著聞集』では、[ABAB]の畳語形式が多いこと、一回性の語は他作品に見られない独特の語が多いこと、既成の語から派生した語が多いことが見て取れ、関連して「めく」型動詞が多いことがわかった。これは『沙石集』以下、他の説話作品にも共通する特徴であった。これらの特徴は、中世の軍記物語のオノマトペが、軍勢の立てる物音や軍勢の様子、弓矢や刀の音など、オノマトペで表現される対象が限られており、定型的表現も多く見られることと対照的である。軍記物語では主に戦乱の様子や武士の描写にオノマトペが用いられたのに対して、説話作品では様々な対象の様々な物音や様子が、場面に応じて臨場感を持つオノマトペによって描かれているため、一度しか使われない独特な語が多く見られ、既成語から派生した臨時的なオノマトペが多く見られるのだと思われる。

## はじめに

オノマトペ（擬音語・擬態語）は感覚的な語彙であり、書き言葉よりは話し言葉に、公的場面よりは私的場面に多く見られる俗語の語彙である。中古・中世においても同様で、森野宗明（1974）によれば、「王朝貴族社会の女性層とは対照的に、大衆社会では、何の気がねもなく活発に、この擬態語群<sup>注1</sup>は使用された」「大衆社会において、擬態語が日常の言語生活の場で愛好され」たという。そして、「平安末以降の説話・戦記物語の世界に至ると、擬態語群の使用は、質量ともに多彩化し激増する」と指摘されている。

森野（1974）が指摘するように中世の軍記物語にはオノマトペが多用されている。『平家物語』に多くのオノマトペが見られることは従来指摘されており<sup>注2</sup>、また、『平家物語』以外の軍記物語にも多くのオノマトペが見られることは筆者の調査<sup>注3</sup>によっても明らかになっている。

説話作品については、森野（1974）が「説話物語の表現の面白さは、こうした擬態語の積極的使用による。直接我々の感覚に訴えてイメージを喚起する、具象的でかつ細かな状況の描写法によるところが大きい」と述べるように、オノマトペが表現上大きな役割を果たしており、いくつかの先行研究がある。中古の『今昔物語集』のオノマトペに関しては、山口伸美（1986）（1998）等により古くから研究が進んでおり、中世の説話については『宇治拾遺物語』のオノマトペに関する研究が進んでいる。市村和子（1968）によれば『宇治拾遺物語』は『今昔物語』よりオノマトペが豊富である<sup>註4</sup>とされ、市村（1968）のほか、伊東玉美（1987）、平田歩（2001）などの研究があり、筆者もそれらの研究を参考に『宇治拾遺物語』のオノマトペを調査し、特徴をまとめた。

上記以外にも『古今著聞集』『沙石集』のオノマトペに関する研究があるが、説話作品のオノマトペをまとめて考察したものはほとんど見られない。そこで、本稿は『古今著聞集』『沙石集』を中心に、『宇治拾遺物語』以外の中世の主な説話作品にどのような特徴が見られるのかをまとめることとする。なお、本稿では和語系オノマトペとともに、漢語系オノマトペについても調査を行う<sup>註5</sup>。

## 1 『古今著聞集』に見られるオノマトペ

『古今著聞集』のオノマトペについては、福田益和（1975）が『今昔物語集』、『宇治拾遺物語』と比較して論じている。（以下、適宜『古今』『今昔』『宇治』と略す。）福田（1975）によると、数量は『今昔』が異なり語数50語、全160例、『宇治』が異なり語数67語、全114例、『古今』は異なり語数56語、全90例<sup>註6</sup>であり、三作品に共通した語を除いた作品独自のオノマトペの割合は、『今昔』42%、『宇治』51%、『古今』59%であるという。また、『古今』のオノマトペは「さめ／＼となきけるを」のような「実質的意義を有する用言（動詞）に接続する」例だけでなく、「なへ／＼として有ける」のような「いわゆる形式用言に属する形式動詞「す」につづいている」例があると指摘し、『古今著聞集』のオノマトペの特徴として「下接語にも新しい用法をはらみながら、宇治拾遺物語に準ずる活写の効果をあげている」と述べている。福田（1975）の指摘を参考に、『古今著聞集』のオノマトペの特徴について考えていきたい。

調査対象は日本古典文学大系本（岩波書店、底本は宮内庁書陵部蔵第一本）である。稿末資料の1に『古今著聞集』に見られたオノマトペの一覧を示した。和語は異なり語数41語、延べ語数94語<sup>註7</sup>であった。なお、和語の場合、引用文や稿末の表では出典の表記に従い「きら／＼」のように重複記号を用いるが、本文では「きらきら」のように重複記号に該当する仮名を表記して示す。

当作品に見られるオノマトペの第一の特徴は、〔ABAB〕型の畳語形式が多いことである。これは『宇治拾遺物語』でも同様なのだが、『古今著聞集』においても異なり語数41語のうち32語が〔ABAB〕型となっており、特徴的である。中世の軍記物語では、畳語形式以外のオノマトペが多用され、頻度の高い語も『古今著聞集』とは異なっている。参考として、『平家物語』覚一本・延慶本、『太平記』の上位5語を以下に挙げる（数字は用例数）。

【覚一本】 はらはら32 ゴ(ツ)と20 ど(ツ)と20 つ(ツ)と19 むずと16

【延慶本】 ツト29 サメザメ21 ハラハラ17 キト13 ムズト11

【太平記】 さつと／颯と48 しずしず／閑々35 きつと／屹と27 はらはら18 ばつと／颯と17

畳語形式以外の語が見られることに加えて、軍記物語では複数回使用されるオノマトペが多く、「よっぴいてひょうど放つ」「むずと組んでどうど落つ」のような定型的表現も生まれている。それに対し、『古

今著聞集』では稿末資料に示したように複数回使用されるオノマトペは非常に少ない。これが次に挙げる第二の特徴につながる。

第二の特徴として、『古今著聞集』で一度だけ（あるいは二度）使用されるオノマトペの中に独特な語が多いことが挙げられる。それらのうち「くたくた」「なへなへ」等は『宇治拾遺物語』にも用いられているが、以下のオノマトペは軍記物語や『宇治拾遺物語』には見られなかった語である。（同語があっても用法が違う例も挙げた。1拍・2拍の語は「と」を付す。〈 〉内に係る語句または内容を示す。数字は複数ある場合の用例数を示す。稿末資料も同じ。）

ゑみゑみ〈笑ふ〉 がぶと〈酒がこぼれる様子〉 からから〈食ふ〉 ききと〈鳴く〉  
 きうきう2〈笑い声2〉 けいけい〈犬が鳴く〉 さわさわ〈掃かす〉 しめじめ〈しづまる〉  
 じらり〈にらむ〉 すばすば〈飲む〉 たらと〈寝入る〉 だらり〈寝る〉  
 ちやうちやう〈鐘を打つ〉 つるり〈鳥の毛をむしる〉 ならなら〈縛る〉<sup>注8</sup>  
 ぬれぬれ2〈様子2〉 のどのど〈歩む〉 ひやひや〈熟柿が当たる〉 びりびり〈蛇がひろめく〉  
 ふたふた〈眠る〉 むくむく2〈毛の様子2〉 ゆすゆす〈動く〉 よはよは〈感じる様子〉

異なり語数41語のうち、上記23語が『古今著聞集』独特の語であり、うち18語が〔ABAB〕〔AA〕型の畳語形式である。

森野宗明（1974）が、説話には「特定状況下の特定の鳴き声の細かな描写」が見られると指摘しているが、ここでは「ききと」「けいけい」がそれにあたる。一般的な鳴き声とは異なり、その場に聞こえた鳴き声を鮮やかに描写している。（括弧内に巻数を示す。）

例1 軒とひとしうみえつれど、障子のしたに成てはむげにちいさし。手も又ほそくなりになれば、いとゞかつにのりてへしふせてをるに、細ごゑをいだしてきゝとなきけり。（十七）

例2 宗任、ちいさきひきめをとて射たりけるに、犬いられてけいとなきてはしるを、（十二）

例1は、狸が化けた化け物を屈強の者が捕らえて馬乗りになったところ、「きき」と鳴いたという場面である、例2の犬の鳴き声と同様に、臨場感のある鳴き声である。

畳語形式については次の特徴3で触れることとするが、畳語以外のオノマトペ（例3・4）も表現効果を上げていることは言うまでもない。

例3 日ごろなる精進なるうへ、さま／＼のつとめに身もくたびれにけるにや、その夜はだらりとしてねたりけり。（十六）

例4 其鳥をとらへて、毛をつるりとむしりてけり。（十六）

第三の特徴として、『古今著聞集』独特のオノマトペ23語のうち8語が、他の語から派生した畳語形の語であることが挙げられる。この「派生語のオノマトペ」は、動詞や形容詞・形容動詞をもとにした造語であり、臨時的に使用されたオノマトペのように思われる。『宇治拾遺物語』にも使用された語や複数例ある語も含めて、以下に派生語らしきオノマトペを挙げる。カッコ内にはもとの語と思われる語を挙げる<sup>注9</sup>。（「鐘をちやうと打つ」は漢語「丁々」からきていると考えられるため、挙げない。）

ゑみゑみ（笑む） さわさわ（爽やかなり） しめじめ（しめやかなり） なへなへ（萎ふ）  
 ぬれぬれ（濡る） のどのど（のどやかなり） ひやひや（冷やす） やすやす（易し）<sup>注10</sup>  
 ゆすゆす（揺する） よはよは（弱る）

これらの語は動詞や形容詞・形容動詞の語幹を重ねた語であり、オノマトペではないという見方もあるが、状況を生き生きと描写しており、感覚的で直接的な表現というオノマトペの特徴を備えている。以下にいくつか用例を示す。

- 例5 やがてまりあがりて〈馬が：筆者注〉出でけるを、すこしはしらせて、うちとどめて、のどとあゆませて、幕下の前にむけてたてたりけり。（十）
- 例6 すべて夜ばかり物をくはせて、夜あくればはだけ髪ゆはせて、馬の前には草一把もおかず。さわとはかせてぞありける。（十）
- 例7 〈前略〉うみ柿のおちけるが、この弓とりの法師がいたゞきにおちて、つぶれて散にちりぬ。この柿のひやとしてあたるを、かいさぐるに、なにとなくぬれとありけるを、（十一）
- 例8 舟のかいははしたなくおもき物にて候を、扇などをもたせおはしまして候やうに、御片手にとらせおはしまして、やすととかく御おきて候つるを、ちとみまいらせ候つるより、運つきはて候て、力よはと覺候て、〈中略〉からめられ候ぬるに候」（十二）
- 例9 牛の腹のほどをさして矢をはなちたるに、死たる牛ゆすとはたらきて、腹の内より大のわらわ、打刀をぬきて走出て、頼光にかゝりけり。（十二）
- 例10 世におそろしげなる白髪のうばまいりたりけり。みすやをら引あげて、ゑみとして、「いかにおそろしくおぼしめし候覧」など申て、きうとわらひて候けり。（十六）

例5～10に見られるオノマトペは、臨時的に作られたようなオノマトペである。従来の語をもとにしたオノマトペらしき語を新たに作り出すことで、従来の語では表しきれない感覚的な描写、生き生きとした描写になり得ているのではないだろうか。

第四の特徴として、接尾語「めく」の付く動詞が多いことが挙げられる。桜井光昭（1959）は『今昔物語集』の擬声語の考察において、接尾語「めく」が付く語も対象としており、同様に池上洵一（1974）も、『今昔物語集』の「俗語的な表現」の中でも「擬声語や、その語基に接尾語「メク」がついて動詞化した「カカメク」「クツメカス」など広義の擬声語の種類の豊かさや使用回数の多さ」が「強く印象づけられる」と述べ、オノマトペと「めく」の付く動詞を同列に扱っている。「めく」動詞は『古今著聞集』においても、「うめく4／めく2／きらめく5／くるめく2／さゞめく／さうめく／ひしめく3／ふためく2（数字は用例数）」など多用されている。中里（2016）の調査によると『宇治拾遺物語』の「めく・めかす」動詞は、「いらめく・いりめく・うめく・おめく・くつめく・くるめく・くるめかす・さゝめく・ざゞめく・さらめかす・そゝめく・そよめく・とどめく・とどろめく・のゝめく・ひしめく・ひらめく・ぶめく・ふためく・ふためかす・をめく」と数多く見られる。「めく」型動詞が多用されることは、説話物語全体の特徴であると言える。

漢語系の語については、稿末資料に見るように疊語が1例もなく、「然」の語が何例も見られ、すべて「然として」と用いられている。「忽然と来たる」と「忽然として来たる」とを比較すると、前者は和語のオノマトペと同じ引用形式である点で、オノマトペに近い印象を受けるが、後者は漢文訓読調らしさが感じられる。『古今著聞集』の漢語は、「然として」と用いられる点で、オノマトペらしさはあまり

感じられない。ただし、「悄然」など心理を表す語が用いられていることは、和語系オノマトペの発達に関わる<sup>註11</sup>点で留意しておきたい。

## 2 他作品に見られるオノマトペ

### 2.1 『沙石集』

稿末資料の2は日本古典文学大系本（岩波書店）により調査したオノマトペである。底本は巻一～十本までお茶の水図書館蔵梵舜本（慶長二年書写、成簀堂旧蔵）で、巻十末は市立米沢図書館蔵本（興譲館旧蔵本、古鈔十二帖本）である。

稿末資料に見るように、中世の説話作品で『古今著聞集』に次いでオノマトペが多く見られたのは『沙石集』である。延べ語数84語、異なり語数49語であった。音誠一（1980）は「擬態語。擬音語は沙石集においては全体に比して割りと多いと思われる」と述べ、斉藤由美子（1999）も『『今昔物語』より、質量ともに多彩になってきている』と述べている。音（1980）は、各オノマトペの使用例を挙げ、「巻々によっても特徴があり、教理中心の説話や、また庶民的、土着的エネルギーのあるふれた説教タイプの説話が混在していることが原因の一部」と述べている。斉藤（1999）は、『沙石集』におけるオノマトペの特徴を「主題と深く関わり、話の展開に欠かせないキーワードの役目を果たしているものが見られる」と指摘し、「同音異義語を使った懸詞式のものが見られる」こと、中でも「動物の声を掛けた＜オノマトペ＞が見られる」こと、リズムカルな同語反復の効果があることを挙げている。

稿末資料の2を見ると、『古今著聞集』に比べて、多くの語が軍記物語にも用いられる当時の一般的なオノマトペである。その中でも『沙石集』独特と思われるオノマトペが、『古今著聞集』と同様に、動物に関する音ともとの語から派生させた造語的なオノマトペである。「動物に関する音」というのは、例11に示すように蟹が泡を吹く音の描写で、先に見たように森野（1974）の指摘する「特定状況下の特定の鳴き声の細かな描写」に近い。

例11 子蟹アハヲカミテ、フシトシテ、ウチシサリテクワズ。（拾遺六一）

また、異なり語数49語のうち、31語が[ABAB]型の畳語形式であることも、『古今著聞集』と同じく特徴的である。それらの中で、名詞・動詞・形容詞から派生したと思われる語を以下に挙げる<sup>註12</sup>。

からから（乾[から]ぶ） しほしほ（しほる） なめなめ（滑らかなり） ぬけぬけ（抜く）  
ぬれぬれ（濡る） のびのび（伸ぶ） ふくふく（膨[ふく]る） ふりふり（振る）<sup>註13</sup>  
ほけほけ（惚[ほう]く） みそみそ（味噌） やすやす（易し） ゆるゆる（ゆるし）

上掲語のうち「ぬれぬれ」「やすやす」以外は、『古今著聞集』では使われていないオノマトペである。以下にいくつか例を挙げる。

例12 アラユル蛇、一口ヅ、嚙テ、ミソトカミナシテ（七―四）

例13 鞠計ナル物ノ目口モナキガ、サスガニ生物ニテ、ナメトシテクルメクナリ。（八―一六）

例14 一ハ杖ノ崎ニ圓ナル物、綿フクト入りタル物有。（拾遺十五―（三））

例15 其後、ソラヨリフリトヲツル物アリ。釜ナリ。又ヲツル物アリ。獄卒ナリ。テウシ器物等、ヲ



チ―シケリ。(拾遺四二)

例12は頭注に「破れ崩れて味噌のような状態になるのをいう」とあり、「味噌」を繰り返してオノマトペらしく使ったものと思われる。例13は頭注に「体の滑らかな状態をいう」とあり、「滑らか」という語からの連想であると言える。例14・15も同様に、既成の語の語幹を疊語形式にすることにより、情景を生きたきと描写するオノマトペらしき語となっている。

また、音(1980)によれば『沙石集』に多くの漢語が用いられているというが、例15に見るように、「きちきち」は「吃々」から来ているのではないかと思われる。

例15 一口クヒケル程ニ、久ク物モクワヌ老者ナリケレバ、ムセテキチ―トス。(七―二三)

「きちきち」も含め、『沙石集』における新しいオノマトペの工夫は、従来ある語からの連想によるものが多いと思われる。「なめらかな」と表現するよりは「なめなめと」、「ふくれるほど」と表現するよりは「ふくふくと」のほうが、感覚に訴える身近な描写となり得ている。

漢語系オノマトペについては、『沙石集』の場合、他の作品より疊語形式の語が多いが、仏教的な語が多く、作品の中でオノマトペらしい働きをしているとはいいがたい。

### 2.3 他の説話作品

稿末資料の3に、『古今著聞集』『沙石集』以外の中世の説話作品をまとめて挙げた。調査対象は以下の通りである。

『古事談』 新日本古典文学大系(岩波書店) 底本:和洋女子大学附属図書館蔵本

『続古事談』 新日本古典文学大系(岩波書店) 底本:等々大学付属図書館小林文庫本の平仮名本

『発心集』 日本古典集成(新潮社) 底本:慶安四年刊本

『閑居友』 新日本古典文学大系(岩波書店) 底本:前田育徳会尊経閣文庫蔵本

『今物語』 講談社学術文庫 底本:陽明文庫蔵写本(十行本)

『撰集抄』 岩波文庫 底本:近衛本(京都大学図書館蔵)

『十訓抄』 日本古典文学全集(小学館) 底本:宮内庁書陵部所蔵本(片仮名本)

以上は13世紀成立と言われる作品であるが、参考までに平安末から鎌倉時代に成立したと推定されている以下の2作品も調査し、稿末資料3の上段に記載した。

『宝物集』 新日本古典文学大系(岩波書店) 底本:吉川泰雄氏蔵本

『古本説話集』 新日本古典文学大系(岩波書店) 底本:文化庁蔵本(梅沢記念館旧蔵)

稿末資料に見るように、各作品のオノマトペ数は少なく、また、複数作品に同一話が採録されているため、作品間でオノマトペが重なっている。また、多くの作品に、先に指摘した「めく」型動詞が用いられている。これらの中で特筆すべきオノマトペを以下に挙げる。

例16 玉冠ニサカリタル玉トモ、チ、リウ―トナルホトニ、(古事談)

例17 この女の顔の、中より二つにわれて、散るやうに見えて失せにけり。これをば人は見ず、ただ入道ばかり見て、いとどおそろしくて、つんつんとかみへ踊りたるが、その後はもとの心になりて行ひけ

り。(今物語)

例18 りん—たる秋の月をのみ恨みあひて (撰集抄)

例16は、冠の玉が鳴るきれいな音を独特の語で表している。先に動物の鳴き声や音の例に見たように、説話において音の描写は臨場感のある個性的な語であるものが多い。例17は口語訳に「ぴょんぴょんと躍り上がった」とあり<sup>注14</sup>、出家した入道の異様な振る舞いがオノマトベによって効果的に表現されている。例18は、漢語が平仮名表記されている例である。平仮名であることにより、漢字の持つ意味に頼らず、言語音によってイメージを喚起する、オノマトベに近い用いられ方となっている。平安末から鎌倉初期成立とされる『宝物集』にも「まん—たる秋の夜」という平仮名表記が見られるが、前に「運々たる春の日」という対句表現があり、「和漢朗詠集を念頭に置いた表現」という注があるように、この場合は、音による連想というよりは漢語の定型表現である。それに対して例18は単独で用いられ、言語音の響きを感じさせる点で、オノマトベに近い用いられ方である。

### 3 中世の説話作品に見られるオノマトベの特徴

以上に見るように、中世説話作品に見られる和語のオノマトベの特徴は、①〔ABAB〕型が多いこと、②既成語から派生した語が多いこと、③一回性の語が多いことであり、さらに④オノマトベに準ずる「—めく」型動詞が多いことも挙げられる。特に一回性の語が多い点については、軍記物語のオノマトベが、軍勢の立てる音（笑い声、関の声、攻め入る音、川を渡る音等）、弓矢や刀の音、武士の動作など描写される対象が限定されており、定型的表現が多いことと対照的である。説話作品においては、オノマトベで表現される物音や状態はさまざまである。そのさまざまな物音や様子を、一般的なオノマトベによってではなく、それに最もふさわしいオノマトベによって生き生きと描写している。多くの場合、既成の語から畳語形式でオノマトベらしき語を作り、あるいは、接尾語「—めく」を付けて動詞化することで、身近で感覚的な表現となり得ている。これらは正式な語というより臨時的な造語であり、他の作品には使われない独自の語となっている。

漢語系オノマトベについては、〔〇々〕という畳語形式の語は少ないが平仮名表記されている例が一例見られたこと、〔—然〕型のほうが全体に多く見られ人物描写にも使われている例があったことを記しておきたい。

### おわりに

中世説話作品のオノマトベを概観したが、軍記物語のオノマトベと対照させることで、中世という時代のオノマトベの様相が見えてくる。オノマトベ研究は音韻・形態・意味面などさまざまな面で研究が進められているが、このように時代ごとの様相を捉えようとする研究も必要ではないかと思われる、山口仲美（2001）には「時代の文物・価値観を映し出す」という項があり、「擬音語・擬態語の推移を分析してみると、変化の側面は時代を映す鏡になっていることが明らかになってきた」と述べられているが、オノマトベを時代ごとに詳細に研究することの必要性を感じる。今後は、近世のオノマトベの特徴について様々なジャンルの作品を対象に調査し、特徴をまとめていきたい。

## 注

- <sup>1</sup> 森野（1974）では、「狭義の、いわゆる音声模写の擬音語、気分、表情などを擬態的に描く擬態語を総称して擬態語と呼ぼう」と述べ、擬音語を含めた総称として「擬態語」を用いている。
- <sup>2</sup> 古くは山田孝雄（1954）『平家物語の語法 下』（寶文館）に指摘があり、西田直敏（1978）『平家物語の文体論的研究』（明治書院）、日本古典文学大系本（19959）の解説にも指摘されている。
- <sup>3</sup> 拙稿（2012）「平家物語の擬音語・擬態語—延慶本、各一本、百二十句本の比較から—」『上越教育大学研究紀要』31巻、拙稿（2014）「太平記の擬音語・擬態語—平家物語との比較を交えて—」『白百合女子大学研究紀要』49号、拙稿（2015）「義経記の擬音語・擬態語—太平記との比較を中心に—」『白百合女子大学研究紀要』50号、拙稿（2015）「『曾我物語』の擬音語・擬態語—諸本の比較から—」『白百合女子大学研究紀要』51号による。
- <sup>4</sup> 市村（1968）に「『今昔物語集』よりも擬音（容）語の語彙が豊かで」「使用度において『今昔物語集』の三倍強で、それだけ多くの擬音（容）語が用いられているといえる」とある（「擬音（容）語」はオノマトベを指す）。また、福田益和（1975）も、「今昔物語集においてはその量に比して擬声・擬態語は多いとは言えず」「宇治拾遺物語はその量よりして擬声・擬態語の増加が顕著である」と指摘する。
- <sup>5</sup> 従来の研究で扱われるのは和語系オノマトベであるが、「漫々」「魏々」などの漢語系オノマトベが和語系オノマトベの発達・生成に大きく関わっていると思われるため、調査に加えた。漢語系オノマトベは、金田一春彦（1978）を参考に、量語型を中心に、「一然」型も調査する。「と・たり」が下接する語を採り、「に・なり」が下接する語は採らない。
- <sup>6</sup> 筆者の調査した数と異なっているが、数量の違いはオノマトベをどう認定するかに関わるものである。
- <sup>7</sup> 福田（1975）と語数が異なるのは、オノマトベの認定のしかたによるところが大きいのが、福田（1975）の表に掲げてある「擬態語」の種類は42種類であり、これが異なり語数なのではないかと思われる。なお、「きときと」（「参れ」の省略）は「きと」が重なったものとみなし、延べ語数には2例と数えた。
- <sup>8</sup> 大系本では「ら」に注があり、「三手文庫蔵本」では「か」であることが記されている。
- <sup>9</sup> 「さめざめ」は天沼寧（1974）では「漕々」という量語であるとして擬態語と認めていない。本稿では元の漢字が一般的ではなく、「さめ」という語幹も考えにくいため通常和語系オノマトベとして扱い、派生語らしきオノマトベとは見なさない。
- <sup>10</sup> 「やすやす」はオノマトベとして違和感があるが、福田（1975）にも「やすやすと」が採られているので、それに倣って今回はオノマトベとして扱った。だが、「夜のしら／＼と明るく」と使われる「しらしら」は「白々」と考えて採らなかった。福田（1975）も「しらしら」を採っていないが、オノマトベの認定基準に多少のずれが生じてしまうことになる。古語におけるオノマトベの認定は、現代語のオノマトベとは別に考える必要があるだろう。
- <sup>11</sup> 拙著（2017）『オノマトベの語義変化研究』（勉誠出版）で述べたように、明治中期の文学作品では、心理描写に関わるオノマトベの多くを漢語に頼っており、振り仮名に和語のオノマトベを対応させていた。和語のオノマトベの生成と発達に漢語のオノマトベが深く関わっていることが窺える。
- <sup>12</sup> 「ほのほの」は接頭辞「ほの」から派生したと思われるが、軍記物語等でも用いられて古くから定着しており、また、オノマトベと認めるかどうかという議論もあるので、派生語一覧に含めない。
- <sup>13</sup> 山口仲美（1998）によれば、「ふりふり」は『今昔物語集』にも見られるという（p. 374）。
- <sup>14</sup> 訳注は三木紀人によるものである。

## 引用・参考文献

- 天沼 寧（1974）『擬音語・擬態語について』『擬音語・擬態語辞典』（天沼寧編）東京堂出版
- 池上洵一（1974）「中古説話の表現」日本語の説話7 言葉と表現（山田俊雄・馬淵和夫編）東京芸術
- 市村和子（1968）「宇治拾遺物語の擬音語・擬容語」『国文』（お茶の水女子大学）29号
- 伊東玉美（1987）「宇治拾遺物語（説話）の文法」『国文法講座5 時代と文法—近代語』明治書院
- 音 誠一（1980）「沙石集における漢語の副詞的用法及び擬態語・擬音語について」『金沢大学語学・文学研究』（金沢大学教育学部国語国文学会）10号
- 金田一春彦（1978）『擬音語・擬態語概説』『擬音語・擬態語辞典』（浅野鶴子編）角川書店
- 斉藤由美子（1999）『沙石集の語法論攷』おうふう
- 桜井光昭（1959）「今昔物語集の擬声語の用例」『早稲田大学教育学部学術研究 人文・社会・自然』8号
- 中里理子（2016）「宇治拾遺物語のオノマトベ—軍記物語との比較から—」『白百合女子大学研究紀要』52号



福田益和 (1975) 「古今著聞集の表現に関する一考察—今昔物語集・宇治拾遺物語との比較を通して—」『語文研究』(九州大学国語国文学会) 39・40号

福田益和 (1983) 「古今著聞集の研究(3)—語彙・語法雑考—」『長崎大学教育学部紀要(人文科学篇)』23巻2号

松尾樹里 (2007) 「『今昔物語集』における漢字表記の擬声語について」『国文学攷』(広島大学国語国文学会) 194号

森野宗明 (1974) 「中世物語説話の表現」『日本語の説話7 言葉と表現』(山田俊雄・馬淵和夫編) 東京芸術

山岡敬和 (2014) 『説話文学の方法』新典社

山口仲美 (1974) 「説話文学の表現—総論—」『日本語の説話7 言葉と表現』(山田俊雄・馬淵和夫編) 東京芸術

山口仲美 (19896) 「今昔物語集の形成と文体—仮名書自立語の意味するもの—」『今昔物語集と宇治拾遺物語』(日本文学研究資料新集6) 有精堂出版

山口仲美 (1998) 『平安朝の言葉と文体』風間書房

山口仲美 (2001) 「擬音語・擬態語の変化」『日本語史研究の課題』(日本語研究会編) 武蔵野書院

### 【稿末資料】中世説話作品のオノマトベ

- ・『古今著聞集』と『沙石集』については、和語を擬音語と擬態語に便宜上分類した。ただし、「めく」型の動詞を和語オノマトベ欄に入れた。
- ・使用状況を明確にするため、〈 〉に共起語句や表す内容を記した。
- ・「凄々し」のような形容詞は採らない。
- ・「ふつと参らざる」のように打消し語と呼応するものはオノマトベと判断しなかった。

## 1 『古今著聞集』のオノマトベ

【擬音語】	から—〈食ふ〉	からり—〈槍を入れる音〉	きう—2〈笑ふ2〉	きゝと—〈鳴く〉	けい—〈犬が鳴く〉
	さや—〈人が参る〉	ちやう—〈かねをうつ〉	つぶ—〈言ふ〉	はあと2〈笑ふ2〉	はたと—〈手をうつ〉
	ほと—〈門をたたく〉	【擬態語】	あみ—2〈す2〉	おめ—〈したがう〉	がぶと—〈酒がこぼる〉
	きと5〈見る2・居直る・参れ・参らせ給へ〉	きときと—〈参れの意味〉	急度(きつと)〈まいらせよ〉	／近度(きつと)〈まいれ〉	
	きら—〈針〉	くた—〈絶え入る〉	さめ／＼2〈泣く2〉	さわ—〈掃かす〉	しめ／＼〈しづまる〉
	じらり—〈にらむ〉	すば—〈飲む〉	する—〈寄る〉	そと—〈そばへ踊る〉	たらと—〈寝入る〉
	たらし—〈ねる〉	ちと11〈まどろむ3・案ず・物をめす・とりかふ(養う)・居直る・見る・つむ(つねる)・申さむ・居直る〉	つるり—〈鳥の毛をむしる〉	なへ—3〈す2・ある〉	なら—〈縛る〉
	ぬれ—2〈ある2〉	のど—〈あゆむ〉	はら—3〈泣く・かはらけのわれを投げかく・蒔く〉	ばら—〈散りかかる〉	ひしと6〈にぎる・居る・押さふ・とる・心にかかる・瞿麦を植う〉
	ひし—3〈相撲で取り組む・抱きつく・巻く〉	ひや—〈柿があたる〉	びり—〈蛇がひろめく〉	ふと—〈待合ふ〉	ふた—〈ねむる〉
	ふつと2〈かはる・切る〉	ほろ—〈涙をこぼす〉	ほろ—2〈袍・泣く〉	みしと—〈抱く〉	むく—2〈毛2〉
	むずと5〈ふまえる・とりとどむ・捕らふ・取る・つかむ〉	むず—〈袴の裏表を引き広ぐ〉	やす—4〈くふ・とどまる・をきつ・し果つ〉	ゆす—〈はたらく(動く)〉	よは—〈覚える〉
	*うめく4	をめく2	きらめく5	くるめく2	さゝめく
	さうめく	ひしめく3	ふためく2		
【漢語】	忽然(こつぜん)2〈来る・至る〉	忽然(こつねん)〈かくる〉	悄然〈ゐる〉	森然〈鋒〉	茫然〈居る〉

## 2 『沙石集』のオノマトベ

【擬音語】	カサ—〈行ク〉	サヤ—〈鳴る〉	タブ—〈波〉	ト、—〈鶏が鳴く〉	トウド—〈落ツ〉	トク—〈鼓を打つ〉
	ハト—〈一同二咲フ〉	ハシ—〈爪弾キ〉	ハタト6〈手ヲ打ツ2・ツマル・打ツ2・衣がある〉	ハラ—〈物ノナル音〉	ヒヤウト—〈射ル〉	フシ—〈小蟹が泡を噛む〉
	ワト—〈人々咲フ〉	【擬態語】	ラメ—〈馬ヨリ降ル〉	カラ—〈ヒル〉	キト—〈父ノ許ヘヤル〉	キト—〈遅いので「早く」と催促する〉
	キチ—〈ムセル様〉	グット—〈ノム〉	サメ／＼7〈泣ク6・打泣ク〉	サメホロ2〈泣ク2〉	サラ—〈読ム〉	シホ—〈瘦セ衰フ〉
	タラト—〈寝入ル〉	チト4〈マドロム・風ニアタル・雨ノフル・申ベキ事アリ〉	ツト—〈入ル〉	ツルリ—〈ス=たいらげる〉	ナメ—〈物の様子〉	ヌケ—2〈返ル・見ユ〉
	ヌレ—〈上ガル〉	ノビ—〈申ス〉	バト—〈倒ル〉	ハラ—6〈泣ク4・涙ヲコボス・打泣ク〉	バラ—2〈出ヅ2〉	ヒサ—〈サバクル〉
	ヒシ—〈ハサム〉	フト2〈通ル・対治ス〉	フク—〈綿が入っている様子〉	フタ—〈切ル〉	フット6〈入ル3・出ヅ2・ハナル〉	フツ—〈飛ブ〉
	フリ—2〈落ツ2〉	ヘラ—〈焼ク〉	ホケ—〈寝入ル様〉	ホノ／＼〈明クル〉	ホロ—〈涙	

ノコボル》 ミソ― 〈囃ミナス》 ムズト〈座ニツク》 ヤス― 5 〈運ブ・過グ・叶フ・思フ・打落トス》 ユル― 〈堅い物がナル様子》 *カ・ヤク キラメク クルメク ソソメク 2 ヒソメク フタメク
空々〈大千無シ》 散々〈打ツ》 済々〈武士》 サウ― 〈云フ》 忿々 2 〈人間 2》 忙々〈人》 明々 4 〈心地・ 六趣 2・本心》 明々〈みゃうみゃう〉〈徳》 幽々〈布薩する様子に》 安然 2 〈化ス・終ル》 兀然〈坐ス》 塌然 〈臥ス》 曆然 3 〈依正 2・影像〉

## 3 その他の説話作品のオノマトペ

宝物集	こそ― 〈失す》 ほがら. ― 〈明けゆく》 ほの／＼ 〈霞こめたる=和歌》 *おめく 3 はためく ／＼遅々〈春の日》 まん― 〈秋の夜〉
古本説話集	うゝ― 〈うめく》 きと 3 〈ご覧ず・まどろむ・得る》 きら― 3 〈露が置く・七星・物》 こそろと 〈蛇が登る》 さは― 2 〈心地が止む・心地がなる》 そよ― 〈蛇が来る音》 つぶと〈ちょうどその 位置に当たる》 どうと〈落つ》 ふと〈え寄り付かず》 ほの／＼ 〈明け方になる》 ゆさ―と〈倉 が揺らぐ》 *うめく きらめく くるめく おめく 3
古事談	キト 4 〈出ヅ・帰リ入ル・目ヲ見入ル 2〉 キト 2 〈供養給へ・試ミ候へカシ》 チ、リウ― 〈玉が鳴ル》 ハタト 2 〈打ち棄ツ・宝剣が鳴ル》 ハラ― 2 〈雀をアブル・扇ヲツカフ》 ヒラ― 2 〈宝剣がヒラメ ク・体をネル》 フク― 〈綿が入ル》 ホロ― 〈落涙ス》 ミシト〈トル》 ムズ― 〈腰刀をケヅル》 *ヒラメク 〃〃馥々〈衣香》 鏐々〈珮声》 顕然〈其の軀〉
続古事談	さめ／＼ 〈泣く》 はたと〈装束く》 ひら― 〈宝剣が光る》 *ひしめく 〃〃忽然〈厨子があく〉
発心集	からから〈念珠を鳴らす音》 きと 5 〈立ち入り給へ・あるべき・思ひ立つ・思ひ出づ・見上ぐ》 さと〈打 ち泣く》 さめざめ 5 〈泣く 5》 ちと 2 〈心のはたらく・まどろむ》 づぶと〈海に落ち入る》 はらは ら〈降る》 はらはら〈布のほころび・紙ぎぬが破れる・髪が乱れ懸かる》 ひろひろ〈蛇の動き》 ふと 〈胸ふたがる》 ふつと〈忘る》 ほのほの 2 〈語る・聞く》 ほろほろ〈布小袖》 ゆふゆふ〈髪の様子》 ゆらゆら〈穂波が出づ》 よよと 2 〈泣き立てる・泣く 2》 *そそく さざめく ふためく
閑居の友	さくりもよよと〈泣く》 さめ／＼ 9 〈泣く 9》 はけ― 〈当たる》 よゝと〈装束く》 よゝと〈泣 く》 *おめく ほのめく
今物語	きと 2 〈見返る・思ひ出づ》 さはさは〈目が開く》 ちと〈くわうりゃうなる》 つんつん〈踊る》 は らはら〈雨が降る》 ふと〈入る》 ほろほろ〈紙衣》 わなわな〈ふるふ》 ゑみゑみ〈笑ふ》 〃〃蕭々 〈秋の夜》 遅々〈春の日〉
撰集抄	をう― 〈感動詞》 きと〈耳を喜ばしむる》 さっと〈文を投げ出す》 さめ／＼ 2 〈泣く 2》 さら ― 2 〈あられが降る音・蕨の様子》 しどろに 1 ちと 2 〈侍り・詩に作る》 ちと〈打ち消し》 はる ― 〈野》 ふつと〈叶ふべし》注 1 ふつと〈打ち消し》 2 ほの― 2 〈夜の様子・齢》 ひしと 2 〈心 に染む・思ひ知られて》 ゆる― 〈風が通る》 よゝと 2 〈泣く 2》 *うめく そよめく ひそめく ほのめく 3 をめく 〃〃漫々 3 〈海 3》 りん― 〈秋の月〉
十訓抄	きと 2 〈思ふ・試み給へかし》 さめざめ〈泣く》 しめじめ〈懸想す》 そよそよ〈畳を踏む》 つぶつ ぶ〈読み聞かす》 ひしと〈取る》 ふと〈入る》 ほのほの〈明けはなる》 ほればれ〈いふかひなき様 子》 ほろほろ〈涙をこぼす》 *うめく からめく くるめく 2 ざざめく すめく ひしめく 〃〃冷 然〈行く〉